

受賞者の横顔

フィールド実験、貧困解消

審査委員 松井 彰彦（東京大学教授）

経済学は科学と呼ぶに値するか。経済学は金儲けのための学問なのではないか。他分野の研究者と話していると、厳しい質問が飛んでくる。それに対する一つの答えがフィールド実験を用いた貧困解消に向けた研究である。今回の受賞者の田中知美氏は当該分野で世界を舞台に活躍する若手研究者である。

空気抵抗など自然界に存在する様々な「ゆらぎ」をコントロールするために物理学から始まった実験的手法は、やがて化学や生物学にその対象を拡張し、20世紀にはついに経済学にも導入された。実験室に被験者を閉じ込めて、コントロールされた環境の下で人がどのような意思決定を行うかを調べる実験的手法は、かなり普及したといつてよい。

これらの実験室実験は現実の経済的な意思決定場面とは必ずしも対応していないため、果たして経済の現場で人々が同様の行動を採るのかという問題提起がなされた。これに応えたのがフィールド実験である。

フィールド実験では実験室のようなコントロールができないため、個人レベルでは様々なゆらぎが入り込んでしまう。この影響を抑えるため、医学の臨床実験のように、人々をトリートメントグループとコントロールグループに分け、統計的手法を駆使して両者の違いを見ることになる。

田中氏の真骨頂はその科学的手法を貧困解消のために用いる行動力にある。米アリゾナ州のホームレスシェルターと協力し、就労した入居者の貯蓄意欲を高めるための施策に関するフィールド実験を敢行した。

貯蓄意欲を高めるため、付加的な賞金を与えると約束したグループの場合、約束しなかったグループに比べ、貯蓄率が25%から45%へと飛躍的に増大したという。

この研究はホームレスにも適切なインセンティブを与えれば、自立に必要な貯蓄習慣を付けられることを科学的に示すものとして大きな注目を集めている。

このほかにもベトナム農村で行った実験に関する論文を『アメリカン・エコノミック・レビュー』という世界最高峰の学術誌に載せるなど業績も申し分ない。

経済学は科学である一方で、「経世済民」、すなわち世を経（おさ）め、民を済（すく）う学問であるべきである。田中氏は今述べたように、一貫して光が十分に当たらない場所にいる人たちにスポットライトを当ててきた。20世紀初頭に経済学の巨星アルフレッド・マーシャルが述べたような「熱き魂と冷静な頭脳」を持った人材が放つ輝きに今後も期待したい。